法本太平記

六編

八

伊13
1838
68

特へ
1833
68

繪本太閤記巻之八目録

小西行長平壤戰明兵話
明将李寧小西が伏候を擒にする図
行長杜丹堂上明軍を防ぎ戰ふ図
惣義智明軍を夜討とる図
漢南人平壤城の七星門を破る図
小早川隆景大破明兵話
行長平壤城を棄て王城へ走る図
隆景倭を後向ふ〻く明兵を破る図
黒田長政隆景が先陣を助ける

小早川九留女橋名の勇将
麦如松が大軍を破る図
小早川が家臣毋上五郎兵衛
麦如松を刺んとする図
加藤清正福志摩尚鑿敵勢話
鬼将軍威名朝鮮人震人図
震天雷の火砲和軍を去る図
福志摩尚鑿元平山破朝鮮軍話
田治勘兵衛衣笠摂之清人射る図

小西行長平壌戰明兵

文禄元年壬辰十月馬石星人名流惟敬人名を伴ひ来り勅書を携へ諸国日本と和睦を図り和将行長三成等を遣し勅書頻りに諸国の軍勢を偽りとなすも近年朝鮮人侯小狄寇と称し防禦乃戰ひ間なく攻よう暴しく偽りなれども集来る軍兵りを大将軍麦如松人副将軍宋應昌人名等力を盡し奮霹靂の如く渤海十二月上旬十五万人の軍兵と整い粧ひて出発し漢南美國の名より三万人の勢を備へ朝鮮の軍勢と合せて九二万余万人麦如松名乞と記し山海関と出て日月甚日踏渡江川を渡り朝鮮に入り浦日本城中に籠り流惟敬人名

明ゐ
李寧
山西の
年候
と
攻
る
図

ゞ為候を待ぐも為だろう丸候もすくなまゆかる和平と後して
朝鮮の城くをもはなうらびに長園花として日をうとしぬる後朝鮮の
又十日も後て十二月の末況惟敬人名より後をなて大明皇帝和
睦のる御密に給ひ以日惟敬自ら日本へ渡海をべしとゆ遣
るる小西石田等大よ歎ひ偽玄蘇よ命じ敵書をとらしむ玄
蘇書の後よ詩一絶と添ひ

枝葉息戦服中藥　巳海九州月一家
喜乳忽消寰外雪　乾坤春早左平花

かくて其年も後よ暮て明る日本の文禄二年大明の方暦
二十一年彩年の事ゝ浮穣名の城中よ入ゝ酒宴ゝ傳
しぬるどけろい軍も止て閑暇なる小太平等諸右郷の志

の志しくて敵とろひ妻子を家に呼寄しげ小て英気を発ゝ右
田三郎けみさまを又ゝ朝長よ中ゝるる況惟敬人名来り和睦の後
を調ゝ乞ゝ人心のる霞歎情よ計ゝ味方の兵卒かくの
ゝ意ゝ我ゝ気ゝるきて際ゝ大明卒ゝ麦考ゝ味方頗
緩ゝ方ゝ朝長実ゝ付城中よ知て大明の和睦固く
怒まゝ軍令よ意ゝ希い新ゝ
付候を出ゝ歎の形勢と何せ日本のゝ城の嫁よ麦面を用
き数十艇のる筏大門をひゝとかけ並べ解旗槍刀雲霞の
ゝ歎考ゝるば打崩んと籠城ゝ厳ゝて厳重之気よ後く
軍卒ゝ英気とまゝ以前ゝ勇ゝ去後よ明の大将軍雪
如ゝ二十余万の天軍と引率ゝ正月元日晴よ卒壌名の要害後

小西行長
牡丹臺
明軍と戦ふ図

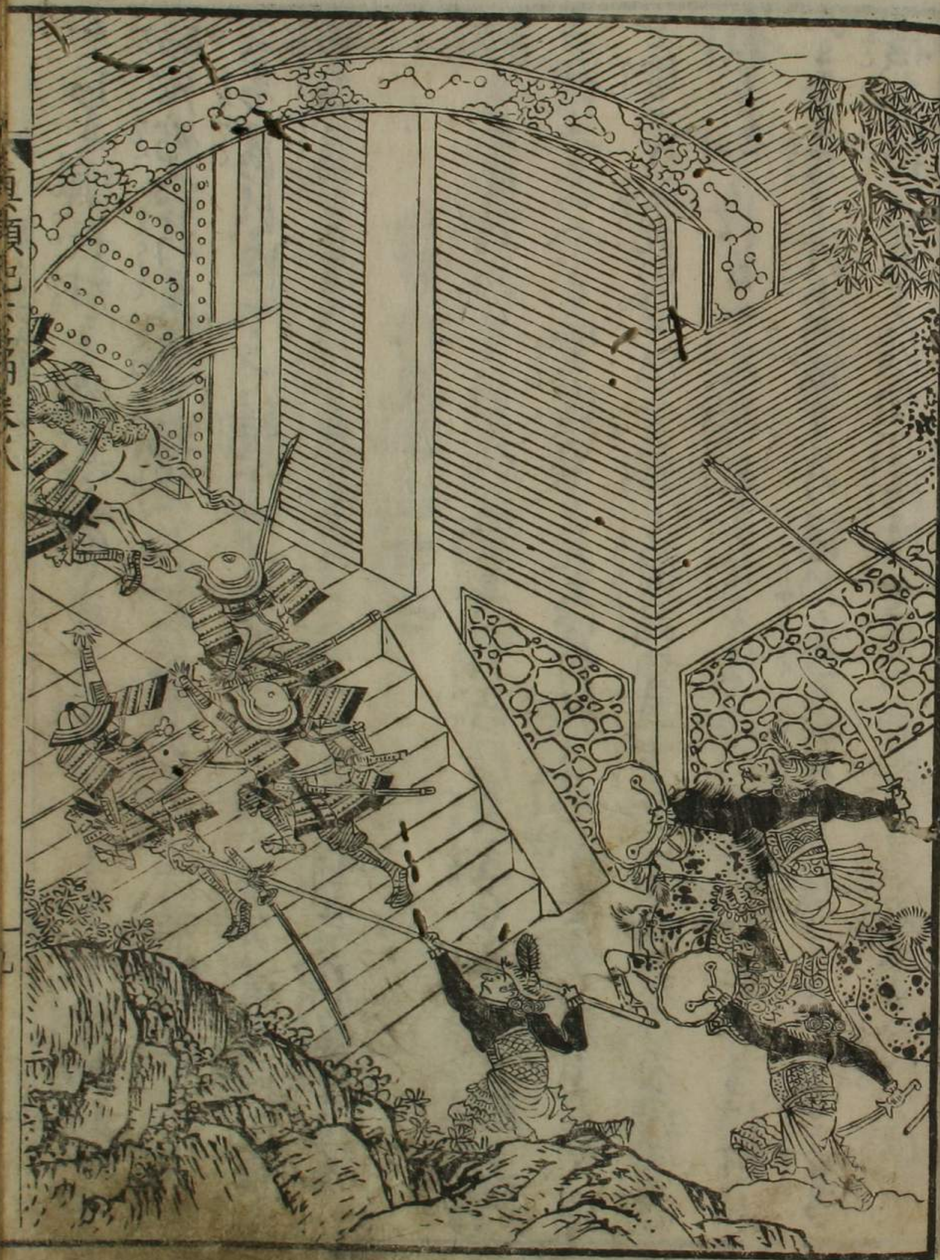
城名を碧蹄と云ふ小西が行候二十餘計の明兵の形勢を
伺ふに大明の先鋒李寧人名と云ふ者去年より朝鮮
に渡り平壤を攻落し日本方より奪ひ
生捕りとなしたる人数三千人迎撃の為長々と言ひ
なれば明兵我等と敵き大軍にて向ひ寄る味方の小勢にて
討て出るは利あるまじ暫くこらへて漸々
日の暮てより給米なしに大義続く城に急使を遣し大明の援兵二
十余万義州名を渡り為る多小西及び黒田の諸大将
へ申し合せと言ふ和せ力を合せて敵に
中い進撃の為に数り考るに大明の大軍
軍潮のごとく押寄せ開を揚て攻よる柳平壤城の地名
あり大同江名の大流あり西は絶山名るく後は要害堅固の城地

城外二里六丁計り牡丹臺と云ふ臺に立方より柵を
を引廻し長々出丸を設け城中の兵勢凡二万八千人小西惣
右黒田谷場田の諸将数を矢に引受けて而乗ずく後砲を
放ちうく矢を丸い矢と云ふ・・・明兵大軍なれども
せば砲を放ち矢筈を射り・・・
忽ち矢に出くと烈くと焼よるば日本勢兵戸名と先と防ぎ
消しむる事如松人名遠り先を見て城中に乗ずる力を合せ
矢を放ち・・・楊元人名張世爵名の両人の軍兵を進めて牡丹臺
の出先と云ふ惟忠人名漢南人三万人を率せ城の後
より攻寄る趙軍平壤城を囲み息を絶せ攻
城中の日本勢も寄と防ぎ戦ひ石を柵より大石

義智
明軍を
夜討をする

大太刀振廻し矢玉を飛たる秋の野の風に乱るゝごとく明の
軍兵散々に成て討るゝもの二十余方の大軍なれば負て
入谷彩をなして楽掛をいつゝ軍ぎ戦とし人々ざうざう既に
日も戦ひ暮し寄手は打ては退うじて笠を打うるを遁るゝ
し城中疲体なるゝ所を見て大軍と破る上は後討とるに如る
長元と人々曰く小勢を以て大軍を引て
旦誰か敵陣へ切入るべき此義智進と出て某軍勢を引て
敵と破んと云長元と強び義智と三度余人の道章と争せ
ん敵の内に刻を城戸を開き明の陣中へ懸入て戦ひ二百騎
斗敵と討とる元来雷震のごとく大軍也ひるまじ方より
引包て矢玉を敵と射出す西とむくべきやうもなく義智が
軍勢も負紀人数多なれば始終勝利なしと軍を引
上城中へ入ける次の日明兵三方より一日に攻を合せ緒波を
攻るべきつもりなる純中須南四郎三百余人搦めとるべき
しく責給七宝門城戸の名を打破うさんぐゝに切立まで日本勢勇
打ゝ人々に用に余る敵の大軍防ぎ兵力なく引ゝ成るを
明の大将李如松人名国を立て味方を拓きそや城い落るでや進め
やとゝ内と下知をなし大軍大波の寄るごとく鬨ひて攻入る
ぞ日本勢防ぎ難く本城として引退く明兵猶きわひ攻
本丸と時のごとく集りて元国を息とも絶ぶ美ゝうゝ小西
行長味方の下知して今は我くゞ討死べき対なるぞ仏と云ひ
力の強ん程の後絶ゝ切側せよと移ひ切て敵ち出る程て

漢南人
子懐の
大星門
を
破る
図



たつを明兵付る〻者甚多く日も暮るゝとそれが暮如松人下
知彼人霧崩返て猶四を敗明日まて計略成宜ち一息
よ者為ん色して様と呼しして軍と治ち城外よ陣と構へ
陣数冊を奏きを弥い美口と甘げて敵の明るを待居う

小早川隆景彼明兵

備て小西摂津守行長い夏敵明兵に美ち是法ち厳敵防
ぎ戦よとゝ〻て雲霞のごとく大軍絶よ無廓を敵ち三千城
と堅ちて寄ひの武士ち六百余人ち夏備者い
教を知ひ日〻大友正ち多ち攻落の勢と待ちれども山対ぞ
いまゞ来〻ひ小西城中ち備ね良ちと集ち謀〻ち味方ち
援兵絶ち来〻ひ今い落城を待の外は其ち合戦い決

限るべ〻ひ今霜敵の攻ひと退きて城先王城へ引ち計略と
宜ち〻勝負を決せ〻やとそ〻よいふ〻ち石田大谷ち〻河と
揃ひ計略埋ち出ち敵ち敵ち地ち〻してみん間よ〻退城ち〻ど
ち〻落ち〻る軍兵後ち上る余人を引ひ城の西の方ち密
よ出〻江の道ち〻に来ち〻ひ天ち長を明ち〻や比の雪天
流ち〻ち〻ち水ち捨て平地の〻ひ色ち〻ち〻ち舟と乗ひ氷と
踏でひ〻ち大江を渡ち〻ち歩渡ち〻ち元ち
係る発意の通ち出て王城ち〻ち撃ち城と揃へ前尾ち敵へ
待へと施せ〻ち大友義統ち比弱の者ち〻ひ明兵二千余方
義平懐治名ち〻ち囲ち〻ち〻ち〻ち行長が知ち〻せ〻ち〻ち〻ち加勢ち〻ち
敵ち〻ち〻ち心ち〻ち〻ち〻ち〻ち大軍ち囲ち〻ち〻ち行長ち〻ち〻ち討

小西行長
平壌城を
攻る図

記してそうらん捨るさき援兵を出し命を免れては叶まじと周章まどひける王城をさして引退く先ぢよりも日本の勢に残さき城をなく勇者九郎を初め九鬼女の両ねも急角の隆慶に目を遂りけるを臨済に大河ありて渡る小舟に乗じて一人も平壌を脱る勢に勝ちし小西行長彼に出して皇城を明兵に渡しける平壌城代義純一人は論せり是種に明の大ね軍愛如松は小西等が退きしを越に乗て勢ひ我さ一日晩天より鼓を打囲を堅め雄の帰泉に押寄る小城中一人も兵なし是は如松兄へとそれば差大さに驚き此の行長を表観くべしとものびやかに討りしかるこそ口惜しかれいざ退けて討兵やと軍勢を引て十里ばかり余り退くれと空遠く退きを人陰も見へし深く追討んと欲の計略もなくて空しく軍を返し平壌の

城に入て軍士の労を休めらるれば小西行長は黙て石田増田大谷なんどと引ぐし雖して王城へ引とるも時小早川隆景は開城府の要害に備へて明の大軍到りば越之戦ひ敵味方の目を覚させんと手配して待ちける所に王城には浮田中納言秀家小西が敗軍を見て大きに驚き黒田永政九鬼女秀の並小早川隆景なんどが出陣を悉らせ明兵は大軍にて押来るよし王城う勢を引集め評議を尽して戦ひ以ては手詰けれど小早川隆景ある是は心せし我勢は渡海せし始めより命をすくに日本へ帰る心しなく先達明の大軍に挙で鉾より兵を出し暫く当分の国打の續ん種々戦ふく我攻落には所を嫌んでも我花繚乱ひ出有り何ぞ大軍に恐て引て敵の鎮を見ずんで退く事を為やせ

小早川隆景陣を後向にして明軍み射とる図
八幡大菩薩

引しけしきをよしとし石田惰田等心よ和る者ありかくて小よ川を
始め味方の諸ね竟き合戦よりはじめ狂て此度拒くべしとて大谷刑部
をはじめ増田長盛よ従しむ刑部元来奉行者の志りしが清正よ對面して稀くと
刑部と流きまてとれるれ志つよりの右ね割士も誰の色よ勝ゆべき
然ども只今僅よ二万よ足ざる小勝をんてさだりり北之軍よ対うて合戦
く討死みんりつ上は勝き次第之具を図へ内忠よりいべ〳〵王城
よ退きまての合戦よ今の勇気とんて先陣よとく大功を立いりんと
いう計の思召なりけんと河を渡て清正小清正ゆう〳〵堀よ脱さ
ぐ此者と引之此後の合戦者八幡人よ先陣させやまぐさぞ是
やはりの慌人とあり後〳〵て紙よ思ふ九国女の清正ねしかや
合せ落ん王城へ退きりさしども清正い人よ先とせ〳〵と南
大内の外濠帰鈴出よ屯とし〳〵敵の来ると待ち立ろ拒ろ明の
軍勢如松名い大軍と引率し日本勢の強所ろ〳〵開城府地名
よ慌し寄して昼〳〵人馬の足と休ち忠月廿五日城州地名ろ〳〵所
と軍兵と押出し此日本の諸大ねを屯て軍の浮渡風〳〵也
しぐ浮田秀家石田三成とし〳〵めを余の諸ね夫軍と引受合の
合戦者ふりし〳〵無軍王城よ攻寄ろ〳〵敵よ〳〵と儀
せ〳〵ろ〳〵橋石近ね陣ろ〳〵敵家目といろ〳〵の掘よ〳〵とうけ敵割
ろしぐ〳〵逃籠るゆうやい唯地せたせ跳ちして攻ん
物とと乱ろ〳〵ふ〳〵ふしぐ人〳〵先よ励まさしうが進と先陣
よ進むべ〳〵ろ〳〵海小よ川清正者ろ先陣
某先陣よ進むべ〳〵と勇〳〵と励ま〳〵此度の合戦よ抑ひて
ゆうやつるよ進へよ〳〵し先陣

まさひくまじくと執て我陣中に立入軍勢の手配り殿後
隆景の人々先手ハ小早川隆景が勇臣粟屋四郎兵衛村上讃
正井上五郎兵衛三千余人橋本繁九郎安芸毛利元康八千余人乃
勢にて右の方三丁計に陣を取る奇兵ハ其本陣ハ隆景一万三
千余人旌旗乃色鮮かに人馬輝よいさぎよき有様ハ実関西乃一
人勇武の大将と見えたり人々舉て感じける頃ハ正月廿六日未だ
東雲の朝霞とけやらで明の大軍寄来るを遥かに見れバ一里斗に
押寄てけり此時隆景味方の軍兵を後向きに立せ敵の勢を見ん
ともせず只下知しけれバ惣軍皆敵の方を後に見て明兵ハ目に
余る大軍なれバ味方の兵士戦をざる先に心臆して胸さとや
思ひけん此時隆景の士大将井上五郎兵衛用意の焼飯十斗余

兼て軍陣隆景の前に来りて敵合近く相成候間士卒に兵糧を
やとひ出させば隆景見て又ツ食し彼侍大将井上も相伴
仕りぬ此人々二ツ三ツ食ひ其余りを近習の者共に与へけれども一ツも
残らで止まりける大軍前に控てかかる落着の合戦に及ぶ様ハ誠に
の英雄ならでハ為しかたしと見とる人々感心しける時に
黒田甲斐守長政ハ歩卒六七人引具し隆景の旗本に来り主膳
御陣押寄ると頃ハいかにと見たりける隆景見て何方
まではなどと仰せ候へども小隆景微笑して来りて仕へ
されバ先手ハ粟屋が力を添へ諸所に陣を張りける長政陣場に
帰り其身を先陣へ向かれける附寄松尾が先手の
大将安国寺を初め朝鮮の大将高彦伯を数万の軍兵ハちらぐく

くるまえいまさ
墨義永政
うきょう
隆京が
ぜんえん
先陣
を
ふせぐ
助る
図

進み寄れバ陸宗孝後向なる味方を下知し正面に向ふて鶏渡を挑り
数百の鉄炮一同に放ち烟煙につゝまれて切てかゝる黒云氷破ハ蛍
風を防ぐ如く大いに帽子を冠く鉄炮を撫へ見合せしが
既に合戦始りしかバ彼綿帽子を脱で世に云ふ盗人ゆかりの甲の
緒をしめ槍が上をつ先に踊り出たる陸宗孝が軍兵是をみて永
政宝をたすけらるゝぞ今日の軍ハ勝なりと罵りて吾一吾二と
突かゝれバ当大夫名古屋氏伯人名なる宝を捨身と犯力を尽し士卒を
下知し勇を励まし長門守ハ鉄炮をふるハ殺しも云んさてそ
なかりける日本の兵卒ハ或ハ三人又ハ五人に取まりかゝる太刀
に武き插をさし黒田より朝鮮ハ大明朝鮮の薄茂なる勢を制り
ある甲冑を斬る其鋭鋒をくじき或ハ阿の天辺よりとんと

二ッに割りてもあり肩より腕をかけて斜に切て倒れもあり鮮血
流れて郷の湖をなし屍ハ積て将に路を塞ぐ明の軍兵ふるひ恐れ
右往左往に逃出れ黄如松人名是を見て後陣より大軍を延く
大に進めバ益く猛りし日本の寄兵ハ九州毛利が勢八千余人横
さまに突かゝれバ大ね陸宗孝一万余人正面より一文字に切てかゝ
命ハ塵芥のごとく兵ハ右に左に靡されけハ明兵の打輕と鎧の袖
まで達ハ彼太刀をふりて薙立れバ大明の兵ハ古今軍之とくだも面
と向べき者なく七裂八裂に切崩され西をさして敗走せしを長
日本の後陣に備へたる浮田中納言秀家小早川岐阜中納言秀
信丹波中納言秀勝木村常陸介精谷内膳正長谷川藤
五郎中川右衛門大夫朝鮮の右京大夫等が惣軍八万余人一同に鬨

小早川
橋
九流女
名乃
勇ねる
雪如松ぶ
大軍を
撃る図

を作り備へを乱して切立れば大明朝鮮の軍勢はるく者を敗と
知て大将雪如松人名もさんぐんより切立るを余りに馬と弛る後
より後さまよどうこと落うり隆景が家臣牛とう郎左衛門雪如松人
とは見知て福ども歌の大将でうんりと槍を揚て花来るを
後卒二百余人近陣てくれとと敗い他の馬に乗て逃のさうり
大将くれどくるしい後卒るじ馬はこらふぐさ薙刀を仕切
敗され討るく者三百余人卒して城州地名を退きるり付櫓右
近将監宗繁い朝鮮人の首二つ鞍の左方に付て陣へ来る
を隆景ふんくくえ敗びるるのひとりされるる小宗繁打死
ひつつ仕るるりていく言へら通で勇くくで人ひうそそ
日本勢ひまく進く退討せんと罵をども小早川隆景笑く見た

制し大軍て城へ追い味方のあ小吉山しとく捕を鳴して軍
地さら王城へ引えろう

加藤清正備志摩尚繁之敗勢

備し日本勢いさしし大軍まて向ふる明の援兵と一戦に切崩し
王城へ入えるる加藤清正備志摩が義ふる咸興
城へ咸興道八道の内に切入くけ附いまど王城に来て濠間を乗越
く侵をくく両ねを振さるをどろく合戦ありて敗ぐ
明の加藤清正去年秋七月朝鮮の両ねるとを捕敗ると
んで元良哈地名と所うびけ勝間をよく備志摩が義ふる咸興
地名の城に来り両ねの勢と保せるくの城くと夷援の敗と
び両ねの勇名雷のごく鳴響き咸興道八道の内二十二郡の地い法

小早川の家臣
井上五郎左衛門
雪如松を
刺んと、
とる
図

岡嶋両人の外に所々地と分ちて配しける鉄砲清正の勇威天
神のごとく向ふ所敵なく雄勇みなく
清正の南無妙法蓮華経の大纛を見てくい朝鮮人恐ぎ怖のき
とりや例の髭武軍よとく朝鮮人を勇猛と恐ぎ小西の時附髭武軍来るとくい時止
はいかだうれ猛武も敢希なるの文りさしが加藤清正の
両武所なる地の要害落りぐよ岩石摘へ雄下の勇士と義
せくを守らしむ此時大明より李如松と大武軍として二十
余万の援兵朝鮮と助勢せるよ四くへ分へ逆強しる
朝鮮の武軍為家よ始りて英気を振く四のお小忠義を奮
さんとこよ三万の軍武を新集ら不くよ雄下揚る若敵

知ぬ[illegible]扶蘇人[illegible]大武軍先よ日本勝と密陽地名[illegible]
討員て[illegible]よ強を居ーぐ気も敵るの軍兵を新撰慶
州地名の城よ押ち命と惜まぐ美さ[illegible]
家臣秋義之本坂明宗女及百余人義城嚴義防ぎ戦却て
奇るの朝鮮人死傷の者甚多宮よ扶蘇人ぐ雄下のお奇
長孫人[illegible]者ける史郷よ妙と[illegible]人よ知ー[illegible]者震雷
[illegible]史炮を巧く出ー武家城中へ打入る小日本人いまぐ史炮
の制を知ぐて懸き物を敵方より投るぞと争て集り見居
よ忽其物雷のごくなる[illegible]史編八方よ散じ人馬と打散し
陣屋を焼き梦天地よ震動ぬ日本人大よ驚き防ぐ[illegible]
[illegible]矢ひらまて強くる大方[illegible]
[illegible]扶蘇人名城郭[illegible]

鬼神軍威名朝鮮ヲ震ス図

雲長孫人名を命じて牧を震天雷と名付て無軍問を作て妥三妥
三を祭人名れば敵後坂川治ざ戦ふの叶ひて城を捨て清心の
本陣さして落行る拾ひ小朴番人名をもとめ朝鮮の一揆名
勢を以て清心が勇臣加藤右三左衛門が部下金山地名の城九鬼巳郎
左衛天井助左衛門山内甚三郎名ら固め守る播中地名城と一対
よ元囲く息を絶せず美濃守名る又猫志摩尚繁が本陣
咸興地名の小八十里六丁里元平山地名とて不知朝鮮の大将雲希徳
人名金義元名とて両人数万騎の大軍を集め大陣営を張り
猫志摩と進雄を変せんとせ外不叶朝鮮盗賊のごとく記
諸方の城を遶り尚も強し世のさまを伺朝鮮の
王城より清正の家臣を以て加藤猫志摩両将も軍を動王

城を攻めゆるべと度々拾ひ加藤い金山地名橋中地名の両城
歌を囲ませ敵ひ出り退くべし退く者尚繁い元平山地名の
歌と討とんば味方引退と退討ませるべし合戦の勇を恵
して急を退陣をべき掃撫をあざしば王城をも諸将評
議のごとを日をとしれ

猫志摩尚繁元平山破朝軍

猫志摩加藤守尚繁い元平山地名の朝鮮を打破り心安く引べ
とを勝機を以て金人元平山地名を押うけ周を作り斬入り朝
鮮の軍兵を矢石を放て本と投うけ日本勝のひるむ不と嘲
笑ひて切て切り命ゆるべ戦ば元来小勝の日本勢の衆ら三
度垂を以度攻を為と大将尚繁大を怒りきるを味方の

震天雷
火炮
和軍
國沢

孤鋒うる軍いかくこそとる拍子に我も續けと喚ひ〻く自ら槍を
引とゞめ雲霞のごとく群がる朝鮮の軍中へ押入と喚ひて突
て入るに不外雄ごとく出て離け左へ退ひ縱横無盡に薙立まば
誰か色めいさまざまん福志摩平左衛門小川市左衛門をはじめと
し水野大藏の長男武の居我勇じと敵中へ駈
入〻前と云る切捨にせよと奮〻と怒号を顧みず
勇と震〻と惡戰をれば朝鮮人大軍とはいへども此勢ひよりて
雄〻大将李希德人馬とおそれ逃ゆるを追ふ
左衛門義孔せり寄る長柄の長槍を小河の横に倒て馬と乘り
眼の光星のごとく虎鬚怒

を逆立て經刀を打〻横のまに進と来る長槍を見るより能敵道を
とる力と打〻り薙とうけ〻斬てうれば彼朝鮮人出き
く長槍を力と薙ひ張倒すの〻く馬より下に引落し長槍を乱
うりとる力と打捨ひ〻く組伏んとする小山朝鮮人元来万夫
不當の勇力にて長槍を小児のごとく横に抱き立て動うせば長
槍これ無之〻金剛力と出〻奮ひ脱んとすれども力何十人
力を兼さしや大鰐石に推と
人孔七川深のみ深よりて長槍を捫んでみ中に
を押浸に二に三にあつと飲せ入引よ〻くを面をとる〻〻多ひ喝要せ
る〻軍次〻に附田路勘左郎と云人強弓の精兵敵を〻討殺〻
附と歩行来りが長槍を叫び横と見て〻大きに驚て強よう

国路
勘二郎
夜叉
宗去湯と
闘ふ図

[illegible]討の朝鮮人が肩先をけさとうけて斬倒し夜叉と聞こえ
夜叉丸と呼び[illegible]物語りを[illegible]法令の悪と附し被朝鮮人
が首を[illegible]く幸陳として海[illegible]る福志摩岡繁[illegible]て寄せ
りくよとひ朝鮮兵船の側とつくどもつくみけるに大勇の者の
夜叉丸は逢強き男にて両人ともに力一振とうへ勝軍と抽さる
咸興城名り賞にうてり